

値生産性との間に直接的関係がないという点において、舟橋氏に賛成する。それは私がマルクス経済学の立場に立つからではなく、中村コメントに指摘されている通り、他の仮説が可能であるからに外ならない。最近われわれ(経済企画庁、経済研究所)で行った研究の結果を要約しよう。(1)昭和27年~35年という期間において、(i)観察したかぎりにおいて産業別の資本集約度の増加率と労働生産性の上昇率との間には、グロス、ネットのいずれをとっても、明確な相関関係はみられない、(ii)平均賃金の上昇率と附加価値の上昇率については+0.5程度の相関を得る、(iii)これを重工業I、重工業II、軽工業の3つのグループに分けると、それぞれの相関係数は増加する。(2)一方、29年~35年の期間において、(i)各産業の平均賃金の変動と年齢別賃金の動きとの間には何らの規則性を見出し難い、(ii)産業別の年齢別賃金の上昇率は29年の賃金水準とマイナスの相関を示し、(iii)更に規模別に細分すると同一額増加、同一比率の増加を示すグループがかなり数多く発見される。

年齢別賃金を賃金率に近いものとするならば、(1)不完全ながら wage contour とみるべきものが存在すること、(2)賃金率の動きは労働市場内部の要因によって、かなりよく説明されるという結論に到達する。これらの事実から、われわれは、賃金率は労働組合を含む労働市場条件によって決定され、平均賃金は産業の発展率及び質的労働力構成によって規制される性別年齢別構成の変化を媒介として、事後的に成立する。そして、この平均賃金と技術的に与えられた労働生産性を前提として、附加価値は製品市場を通じて、これまた事後的に平均賃金と順相関をもつような関係に決定される、という仮説にかたむきつつある。この仮説の検討は今後の問題に属するが、少なくとも、平均賃金と賃金率を区分すること、資本ストック・データによって資本集約度の時系列変動を観察するということによって、舟橋、篠原両氏の間隙が埋まる可能性を示している。又団体交渉における経営者の賃金政策、decision making のプロセスの分析が行われ、賃金決定についての企業家の行動が明かにされるならば、又新たな光が問題の解明に与えられるであろう。

本書から得た私の印象は、実証分析という土俵に立つかぎり、2つの経済学の対立というキャッチ・フレーズは極めて瞬目なものであり、争点の大部分は未開発の分野をめぐって行われているということである。

本書各論文の間隙を埋める仕事は、他の方面からも行われなければならない。たとえば、慶応グループが進めてきた応募函数や労働供給函数に関する研究成果は、わが

国の賃金構造をよりよく理解する上に、欠くべからざるものであり、さらに団体交渉、賃金体系が賃金格差、賃金水準に及ぼす影響、wage contour の確定と相互関連性、地域分析、さらに製品市場、資本市場における需要及び価格に関する分析などこれまで未発達であった分野を1つ1つ克服することによって、より正確且つ具体的な事実認識とその上に立つ新しい理論をつくりあげることができるであろう。

中村氏のいう如く「前途は遠い」。だが本書の執筆者諸氏が遠い道を歩みつづけるであろうことを期待する。

〔佐々木孝男〕

ナウム・ジャスニー

『ソ連の工業化(1928—1952年)』

Naum Jasny, *Soviet Industrialization 1928—1952*, The University of Chicago Press, Chicago, 1961, pp. xviii, 467.

本書の著者であるナウム・ジャスニー Naum Jasny は、1884年にロシアに生れ¹⁾、革命後ロシアを去り、1930年代の初期に合衆国に住みつき、それ以来ソ連経済の研究者として活動している人物で、ソヴェト経済についての多くの著書と論文がある。主要な著者はつぎのとおりである。—*The Socialized Agriculture of the U. S. S. R.* (1949); *The Soviet Economy during the Plan Era* (1951); *The Soviet 1956 Statistical Hand book* (1957)。その傾向からいって、アメリカにおけるソヴェト経済研究者の最右翼にある人物である。

本書は、その表題の示しているように、1928年より1952年にいたる約 $\frac{1}{4}$ 世紀のソヴェト経済の発展を工業化に主点をおいてあとづけたものである。

本書はつぎのような章別構成より成っている。—
第1章 序論と要約; 第2章 最初の攻撃と休息。
第1部 第2次大戦以前。第3章 工業化の準備期;
第4章 総力運動; 第5章 総力運動つづき; 第6章 好調の3年間; 第7章 好調の3年間, 私的セクター;
第8章 粛清期; 第9章 粛清期, 私的セクター。
第2部 第2次大戦以後。第10章 スターリン万能期;
第11章 インフレとデフレ; 第12章 投資;
第13章 農業事情; 第14章 農業生産と市場; 第15章 工業, 運輸, 人口1人当り生産額; 第16章 小売

1) 著者は、1961年に出た本書の序文で(p. ix.), “The writer is over 77 years of age” と言っている。

商業；第17章 個人所得，国民所得；むすび。

以上のほかに付録として，国民所得，賃金，等にかんする簡単な統計データと20年代のソ連で活躍した経済学者であるヴラジミル・グスタヴォヴィッチ・グロマン Владимир Густавович Громан(1873—?)の伝記がついている。ついでに書いておくと，この，付録になっているグロマンの評伝は，非常に主観的なグロマンの讃辞で，グロマンの伝記としても，グロマンの計画活動の叙述としても，余り役に立たない。著者の老人らしい，愛着の感情が吐露されているにすぎないのは，われわれとして残念である。

序文によると著者は，前記グロマンの紀念に全2冊に上るソヴェト計画経済論を書こうとしたが，それがなかなか完成しないので，本書に切り替えたというのである。彼は，「この仕事はおそらく私の最後の主要な仕事の1つである」といっている(序文，p. vii.)が，たしかにそういうだけの質的な仕事である。付録や索引ともにA5判467ページの大冊であるというだけでなく，そのなかへ，彼は彼の永年の研究成果を材料としてぶちこんでいる。この著者の基本的な視点，方法論ないし結論に賛成しかねる人々といえども，このなかへ豊富にたたきこまれた資料には感心せざるをえないであろう。わが国の研究者には20年代および30年代の研究のための基本的な直接資料が欠けているということもあって，このなかで著者が提示する具体的な史実には，圧倒されてしまう。それに賛成するにしろ，反対するにしろ，著者と同じだけのデータがこちらには欠けているので，著者の示している極端な考え方をどう判断すべきかということになると，正直に言って困ってしまう。とはいうものの，事実せんさく癖という見地からは，ともかくこの書物を読み進まざるをえないのである。——評者はこの書物を以上のような感じで読み進んだ。

この書物の基本的な立場は，1928年から52年まで，つまり本書の取扱う25年間に実施された5つの5ヵ年計画が，計画としては無であり，宣伝目的以外の何ものでもなく，目標はほとんど遂行されなかったとしていることである。著者はそのように断定する理由として，各計画が，計画開始時には，国民経済計画の形をとって与えられていなかったことを挙げている(p. 26.)。これはたしかにソ連側としては手痛い指摘であり，ジャスニーの指摘は，事実にかんする限り，あやまりではない。ただ，そのことから直ちに，ソ連の5ヵ年計画は，経済の実態とは何のかかわりもないと結論するのは，いささか大胆すぎる。——というよりは，誤りである。

しかし，ジャスニーは，この確信をもとにして，各5ヵ年計画期をそれぞれの区切りとみなす，従来のソヴェト経済史の時期区分を誤りであるとしている。彼自身も従来は各5ヵ年計画期の時期区分を採用していたのであるが，過去の自分自身も誤りをおかしていたと述べて，新たな時期区分を採用する。それは，つぎのとおりである。

- (1) 工業化の準備期 the "Warming-up" (1929-30)
- (2) 総力運動期 the "All-out Drive" (1931-33)
- (3) 好調の3年間 the "Three 'Good' Years" (1934-36)
- (4) 粛清期 the "Purge Era" (1937-40)
- (5) スターリン万能期 the "Stalin Has Everything His Way" (1941-52)
- (6) スターリン以後 "Post Stalin" (1953—)

老の一徹といおうか，ジャスニーの時期区分は，訳語に苦しむような奇妙な名前を各時期に付けているが，彼のこのような時期区分の理由は，それぞれの時期の経済成長率にある。ジャスニーは，5ヵ年計画期を単位として区切ると，各時期の重要品目別の成長率の消長が平均されてしまって，経済自体の実質的な内容変化を消し去ってしまうという見方から，このように奇妙なそして細かい時期区分を新たに導入するのである。その時期区分をもとにして本文(第1部および第2部)において，その各時期別の詳細な分析を与えている。

われわれが問題としたいのは，ジャスニーが公表統計の再計算によって実証する経済成長率の消長をそのままのみこむかどうかであり，さらに，百歩ゆずってそうするとしても，成長率の消長という観点だけをとりだして，それをメルクマールとしてソ連の工業化の全過程なり，その経済発展の意味内容を概括しうるかどうかにかかっている。

ジャスニーのこのような考え方は，20年代すなわちグロマンその他が活動していた時期には計画があり計画経済があったが，彼らがバージされたあとでは計画は全然なかったという確信であり²⁾，重工業生産力の飛躍的発展は，理論上，搾取度の強化と生活水準の圧殺以外に，その原因をもとむべくもないという，かなり素朴な決定論的見解である。こういう考え方は，本書全体にたたきこまれている豊富な事実資料の価値を少なからず減殺する。事実この書物は，提示されている事実資料そのものに疑いの眼をむけなくていいとしても，その資料の使用法なり，その資料の解釈なりについて，たえず読者自身の見識で再構成しながら読んで行かねばならぬと

いう点で、かなり読み難い書物である。にもかかわらず、事実上ソヴェト工業の劃期的な発展・成長の時期であった 30 年代なり、社会主義的工業化運動なりを「個人崇拜」以後の眼で認識・再検討するためには、本書のような最右翼の書物も、無下にしりぞけるわけには行かない。

評者は、本書を正しく読み、厳正に批判するための鍵は、いわゆる「スターリン時代」の評価に在ると思う。本書の著者はスターリン時代を徹底的に否定しており、同時にスターリン時代の建設を軍事力の拡大と宇宙開発の基礎をおいたという点では評価する。その方法は搾取度の強化と国民生活の圧殺であるというのである。著者が

2) 52-53 ページへかけての長い注で、著者は 20 年代の末期の計画化活動とそこで活躍した planners への評価を与えている。本書が、著者の熟知し愛惜している、20 年代末期を主題としてとりあげ、この「注」で短かく要約し、示唆した点を、正面切ってとりあげてくれれば、よかったと、評者は思う。しかし、そうはいうものの、折角のグローマンの評伝(付録)が具体的データの裏付けの余りない主観的詠歎に終わったことを思うと、これ以上つまこんだ叙述と評価とをこの著者に望むべきでないのかもしれない。

その末尾近くで言っているつぎの言葉が端的にそれを現している。——“It was the drastic exploitation of the whole population that permitted the immense investments, the messy state of prices, misinvestments and, last but not least, the very large expenditures on the armed forces. While there has been a substantial improvements in personal incomes since Stalin's death, real wages did not regain their 1928 level until 1958.” (p. 434.) この考え方は、「体制論」ぬきのソ連工業化論であるという点を別にしても、やや単純にすぎる。しかし、ソ連の経済学者が彼らの所有する(彼ら^{のみ}の所有にかかる)原資料を使って、いわゆるスターリン時代のくわしい再評価をなしとげない限り、1956 年のフルシチン秘密報告の示唆する「スターリン暴君説」だけで 20 年代 30 年代をわり切ってすましている限り、本書の著者のこの過度の一般化を貶下し去るわけにはいかない。

[野々村一雄]